

飛鳥山(あすかざん)発音寺(ほつおんじ)

中尾 求

市の指定文化財の佛尊像を、三体安置する発音寺は浄土宗に属し、春日丘四丁目にある。

平成七年一月十七日の震災で、建造物は全壊し多数の佛尊像も破損したが、再建修復された。本堂は変形様式で、指定の三体を含む諸々の佛尊像が、博物館か宝物殿のように一堂に安置されている。内陣には浄土宗系の本尊 阿弥陀如来立像、善導大師、円光大師法然の立像と、市指定文化財の十一面観音菩薩立像が並置されていて、ユニークな配置になっている。

本尊が二体という稀有については、この寺は慶安元(1648)年開創、古義真言宗に属していたが、由縁で元文元(1736)年十月十九日(体内に墨書あり)南都唐招提寺(真言律宗)より、十一面観音菩薩立像の寄贈を受け本尊としたことに依る。変遷の後、明治十二(1879)年三月再興され、浄土宗鎮西派奈良興福院末寺となり、阿弥陀如来像を本尊とした。

内陣の左側に毘沙門天、吉祥天、善膩師童子^{ぜんあぶらしどうじ}三尊像。右側に市指定文化財の三面六臂大黒天像、そして不動明王像、市指定文化財の胎藏界大日如来像、一面八臂弁財天座像、地藏菩薩像、釈迦如来立像(出山しゅつざん)等が並び、向かって左奥には堅固な厨子に納まる、組み合わせの珍しい 釈迦、阿弥陀、十一面観音三仏座像が安置されている。

中でも白眉は三面六臂大黒天立像で、像高148センチメートル。宝珠を表す二つの俵の上に、正面は大黒天面で頭巾を被り、向かって右に歯を見せる弁財天面、向かって左にふん怒相の毘沙門天面、向かって右 第一手に袋、第二手に宝珠、第三手に鑰(かぎ)、向かって左 第一手に小槌、第二手に宝棒、第三手に三戟を持ち、直立する。堂々とした迫力ある像容は、日本(世界)でも屈指の大作で、独立した安置でないのが惜しまれる。

江戸末期から戦前(昭和十八年)まで、有岡八景の一つ「野村の晩鐘」として、文人墨客 特に俳人に喧伝された。発音寺の鐘が消えてから久しく、周辺の景観風情の激変を嘆く古老も少なくなった。



三面六臂大黒天立像

<第2回史跡巡り>

伊丹の「自然と文化財」 〓市制65周年記念事業〓

～清酒発祥の地（鴻池）と満開のバラ園を訪ねて～

後藤昌弘

先日10/22（土） 当会主催、伊丹市・伊丹市教育委員会・いたみアピールプラン推進協議会後援で標記のガイド活動を実施しました。今回は市民対象事業としては今年2回目のイベント、加えて市制65周年記念事業の一環としても位置づけられ、募集人数も50名として取り組みました。種々計画されるイベントのなかに類似のイベントもあり、また今回の出発点へのアクセスが必ずしも便利とは云えない点等数々の負要素もあり、市民の関心はいま一つの感でしたが、募集締め切り後の追加応募で一般参加者32名、当会員を加えて総勢約60名での実施となりました。ご参加の皆さん、有難うございました。

秋の気まぐれ天気は前日2日程は晴天、当日の予報は集合時間と歩く時間帯のみ傘マーク、前線の端っこがかかっている。気象衛星の雲写真の状況もよろしくない。久しぶりに気象庁時代を思い出しながら最後、降水予測50%に「実施決定」。ただし、雨具持参だけは念のため通知の要を感じ、前日作成の伝達ネットも活用させてもらった次第。

当日の行程 荒牧バラ公園（自由散策）に始まり、のち再集合、挨拶、写真撮影、出発、いきなりそこそこ急な坂、のぼりつめた所で下を見ると水のない天神川。荒牧バラ公園に南西方向から来た人には訳のわからぬ短いトンネルの部分があるが、このトンネルの上が天神川とご存知かな？ 2

つの信号もスムーズにパス。天日神社では地元地車保存会の方々の協力で珍しい地車をまじかに拝見。静かな住宅地をにぎにぎしく通過、民家の犬にも吠えられながら容住寺へ、いにしえの古き歴史を拝聴。天王寺川の土手に自然を感じつつ鴻池稲荷祠へ、清酒発祥の歴史・鴻池家発展の歴史を拝聴。急遽ポイント追加した清酒発祥の地碑へ、スムーズな時間経過に満足、ほっ！慈眼寺では何やら行事があると聞いていたので門前で説明となったが、寺内は静か。説明はなかなかの詳細な調査結果、重文の木造釈迦如来像も世間の「静寂」を望まれている事であろうことよ……。鴻池神社は失礼ながら所在を確認して前を通過。工事中の改良道路の歩道を西進、再び天王寺川の土手へ、南進して中野稲荷神社で県指定天然記念物のイヌマキの大木にびっくり。少し行って新田中野村先駆者顕彰碑へ、ここでは中野地区の開墾当時の功労者の話。そして本日の終着地点、サンシティホールへ、約4K。予定時間を若干のオーバーで到着できたこと、皆さんの協力の賜物です。何とか雨にも降られずに済み、挨拶、出発点での写真をアンケートと交換に解散。今回のコースは特に市南部にお住まいの方にとっては市内の自然・文化の再発見につながるイベントであったと思います、短時間の簡単な説明でしたが、再度訪れるきっかけになれば幸いです。なお、翌日の天気と接し、一層のこと当日決行出来たことに感謝です。有難うございました。

＝市内東南部を歩く＝

滝山昌彦



去る9月27日、水曜グループ担当による屋外研修を行いました。コースは、神津停留所前から春日大社→松源寺・阿部備中守の墓→伊丹市埋蔵文化財口酒井整理事務所→田能遺跡（資料館）で、参加者は23名でした。

春日大社は、本殿が県の有形文化財指定を受けた一間社春日造で、藤原氏一族の荘園が近くに拡がっていたことからこの地に建てられたようです。埋文事務所では中畔さんから遺跡の概要など丁寧な説明を

していただき、縄文晩期の初圧痕土器や黒褐色の河内系土器などを見学しました。田能遺跡資料館では県内・大阪各地出土の「武器類」を展示した「弥生の戦」展を見学しました。学芸員の方の解説では、弥生中期から石や銅製の鏃・剣などが刺さったままの埋葬例が増えることから、水稻耕作に関して水資源や土地をめぐる抗争・戦争があり、それが後の「倭国大乱」（弥生後期）へと拡大化していく経過が興味を引きました。

田能遺跡は、私がまだ19か20歳の大学生の頃に発掘が始まり、帰省した折に飛び込みでの調査参加をさせていただいた思い出のある遺跡です。固い関東ロームにいたる土層での調査経験しかなかったので、低湿地の泥に塗れた発掘には驚きました。

方形周溝墓は当時（1965・6年頃）にようやく注目され始め、それが一気に各地で発見が相次ぎましたが、封土にあったであろう埋葬施設が技術不足かまたは削平されてしまったことで不明のまま見過ごされてきたことも多かったと思います。

最後に、1960年代以降の全国的な大規模開発の事前調査（行政発掘）により多くの遺跡が破壊されてきた中で、田能遺跡が研究者・住民の運動により保存されてきたことは特筆すべきことといえます。

「弥生の戦」

難波寿美

刈る刻む 稲穂つみ採る石斧にて 血の争いの 痕の沁みいつ

肋骨に 食み込みささる石鏃が 棺なかばに 鈍くとがれり

二上山 サヌカイト製武器とあり 石剣・石鏃 「倭国乱」

安らげき 秋の真昼を光りつつ 石剣ふりくる 危うさにあり

学校外活動を終えて

柴田久子



子供達が土曜日の授業から解放されて久しい。この「学校外活動」も、子供達が少しでも有意義な土曜日を過ごす手助けになればと始められた。

いろいろ試みたが、ここ2・3年は「古代人の食べ物」をテーマにしてきた。今年も去年につづき、第2部で弥生人の食べ物を、そして第1部では伊丹の民話をもとに、紙芝居とペープサートを制作した。

第1部の紙芝居のグループでは「ザ・どんぐり」を発足させ、民話をもとに脚本作りから絵や人

形・舞台背景等すべてを、手作りして子供達に見てもらった。紙芝居は『三軒寺の砂かけ狸』・『昆陽寺の盗まれた釣鐘の物語』ペープサートでは『片目の行基鮒』とそれぞれに配役を決め、語る人・人形を動かす人・ハーモニカを吹く人と平均60才のおじさん・おばさんが童心に帰り楽しんだ。おおむね好評だったと自負している。

第2部の食べ物のグループでは、メンバーが秋から種を蒔き育ててきたエジプト豆を入れたご飯や、古代米である黒米をまぜて炊き上げたご飯を、子供達と共におにぎりにした。また若芽やいりこを使つての汁物・どんぐりを焼いたおやつ等も用意して古代を偲んだ。部屋の中には、木の実や小魚等の海産物と、その頃の食生活を彷彿とさせるものの展示やポスターが張り出され、子供達の知識もより深まったのではと思われる。その後ハガキの語源になったと言われる「たらよの葉」に手紙を書いたり、どんぐりで独楽を作ったりと、盛り沢山の行事で一日を終えた。

今まだ、サンタクロースを住まわせている子供達の心の片隅に、何かを残せていたら幸いである。ただ子供達の参加人数が、やや少なかったのが今後の課題となりそうだ。

余談ではあるが「ザ・どんぐり」はその後幾つかの出演依頼があり、出演者をやりくりしながらも調子にのっている。



主な行事予定 (11月～12月)

11月08日(火)	秋季バス研修旅行「赤とんぼの里」竜野市を訪ねる
11月18・19・20日	中央公民館 「秋のフェスティバル」9～17時
11月22日(火)	屋外研修会 伊丹市西部武庫川地区を歩く(担当 木曜班)
12月13日(火)	12月定例会
12月15日(木)	しめ縄作り 中央公民館 10～12時